

レジャー論から見た「オープンガーデン」に関する一考察

— 千葉県流山市を事例として —

土 屋 薫*

要 約

セレンディピティ (serendipity) という視点に立つと、これまで「想定していなかった」視点からものが持つ価値に「気づき」、それを中心にあらためて自身と生活を組み立て直すことこそ、ポスト大衆消費社会において求められている豊かさのかたちであることがわかる。また、「想定していなかった」ことを思い浮かべる契機として、ある土地の価値あるものとの「出会い」を実現する観光の持つ意味は少なくない。ここにさらに語源から捉えたレジャー概念を導入すると、観光による「出会い」の場から日常世界を組み替えるという幸福のかたち (モデル) が見えてくる。オープンガーデンはこれらの要素の結節点として注目される。きわめて限定的ではあるが、実際に千葉県流山市をフィールドとして調べてみると、オープンガーデン参加者 (見せる側) と訪問者 (見る側) の双方とも、ガーデニングという共通する趣味を媒介としたネットワークづくりを求めていることが確認された。これは交流による出会いによって日常世界を組み替えてストレスを軽減しようとする動きとして、仮説モデル検証につながる証左と捉えることができる。

キーワード: セレンディピティ (serendipity), 豊かさの実現, 着地型観光

1. はじめに

幸せについて説明するのにセレンディピティ (serendipity) という言葉がある。セイロン (現スリランカ) の古名であるセレンディブの3人の王子に関わる故事から、イギリスの政治家であり小説家でもあるホレス・ウォルポール (Horace Walpole) が18世紀につくり出した言葉だと言われている。あえて言えば、「ふとした偶然から価値あるものを見つけ出し、発見したものの中から幸せをかたちとしてつかみ取る能力」という意味になる。

現代社会は価値観が多様化していると言われて

おり、数百ものチャンネル数を持つ衛星デジタルテレビ放送がそうであるように、あまりに多くの選択肢があるが故にかえって「どれを選んでもいいかわからない」状況に人々を陥らせていると言っているだろう。その意味で、選択肢の多さに起因する一種の「アノミー」こそが、人々を豊かさから遠ざけている遠因と捉えることも的外れではないだろう。第2次世界大戦直後に比べ、これほどまでに経済成長が実現してモノが溢れているにもかかわらず満足感に欠けるのは、自分の欲求に答えてくれる「近似値」が数えきれないほどあるにもかかわらず、そのどれもが他と差別化できるほどの決定力を持たないからではないだろうか。それこそが「心の豊かさ」を求める気持ちとして、内閣府の世論調査結果の背景にあると思われる。そして、こうした時代だからこそ「セレンディピティ」という言葉の持つ意味にも説得力が出てくる。

2010年11月30日

* 江戸川大学 ライフデザイン学科准教授 レジャー社会学、
レジャー産業論

これまで「想定していなかった」視点から、そのものが持つ価値に「気づき」、それを中心にあらためて自身と生活を組み立て直す。それこそがポスト大衆消費社会において求められている豊かさのかたちであり、そうした行為を総称して「ライフデザイン」と呼ぶべきではないのだろうか。ただこのとき問題になるのは、そもそも「想定していなかった」ことをどのようにして思い浮かべるか、ということである。これを実現してくれるものを平易に表現するとすれば「出会い」という言葉になる。

「国の光を観る」ことが観光だとすれば、ある土地の価値あるものとの出会いこそが観光の本質と言える。ここに語源から捉えるレジャー概念である「リベラル・アーツの能力を身につけた人間に与えられる自由な心の状態」という定義を導入すると、「ストレスフルな日常世界を改変したい」という思いが観光という行為の推進力であることを説明してくれる。日常世界のルールとは異なるリベラル・アーツのルールに身を任せることではじめて、日常世界に起因するストレスから解放されて気持ちが自由になる、というのである。そして、最も低い障壁の「日常世界と異なるルール」が、個人的な能力に左右されない「移動」ということになる。そこに「出会い」があり、そこから派生して日常世界を組み替えることができれば、どれほど小さなものであろうと、そこに必ず幸せが生まれる。セレンディピティという概念はそのことを教えてくれているのではないだろうか。

本研究では、このような問題意識に基づき「オープンガーデン」に着目した。ガーデニングという、ある種人間社会のルールとは異なり生態系のルールに則って動いていく活動を中心にして、そ

こに発見や出会いの要素が加わり、さらに移動に関する障壁も最低限に抑え得るオープンガーデンこそ、セレンディピティによる幸福観を実現してくれる好例として捉えられるからである。

実際のフィールドとしては、千葉県流山市で6年前から毎年開かれているオープンガーデンを対象とした。天候のすぐれない平日の3日間にもかかわらず、のべ6900名を超える来場者を記録するような状況が発生している(2009年)からである。さしたる観光資源も無く、また産業化されておらず、決して交通の便が良いともいえない地域の数十軒(2009年は35軒)の一般家庭の庭に、どうしてこれほどの人間が訪れたのであろうか。

このような観点から、流山市のオープンガーデンをフィールドとして、オープンガーデン参加者(見せる側)と訪問者(見る側)の双方から取ったアンケートを比較検討することで、両者のニーズの結節点とも言える「出会いの場」について明らかにし、レジャー論の観点からオープンガーデンの意味を捉えることを目的とする。

2. 「流山グリーンチェーン戦略」の現状とコミュニティ形成の限界

2005年8月につくばエクスプレスが開業したことに伴い、都心との時間距離が30分未満と大幅に短縮されたことによって、流山市の開発は大規模に進んでいる。人口と世帯数の推移から見てみると、この数年の数値からは、つくばエクスプレス開業を契機とした開発による人口増加が著しいものであることがわかる(表1)。

流山市は2005年以来、「流山グリーンチェーン戦略」と称して、景観形成及びヒートアイラン

表1 流山市の人口および世帯推移

年(4月1日現在)	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年
人口	150706	150910	152791	155382	156073	158426	161258
対前年増減数(人)	3	204	1881	2591	691	2353	2832
世帯	57090	57844	59403	62047	62288	63985	65792

ド現象の抑制に関わる緑化を進めようとしてきた。それは、緑化活動の動機づけに際してコミュニティ形成によって得られる個人的利益から誘導しようとする施策であった。各戸が生活環境として「自分の家の庭」の改善に向けて最大限に努力していくとき、自分の家だけでできることには限界があることを自覚する。そして、必然的に近隣と連携を図っていく必要を感じる。そのとき、自分の家の庭およびそれに連続する隣家の庭や街路樹、近隣緑地を一種の共有物として協力しあう場が構築され、緑化による生活環境の改善は最大効果をあげる。またそれに伴って、コミュニティ形成も促進される、というのである。

それでは実際に、流入する「新住民」を巻き込んだコミュニティ形成が功を奏しているかという点、現実的には厳しい壁に直面している、と言わざるを得ない。

具体的な施策として、「流山グリーンチェーン戦略」は、「接道部緑陰化・敷地内緑化・敷地内通風」といった条件に適合した物件を「グリーンチェーン認定」物件として認定している。

ただ2009年度の調査によれば、グリーンチェーン戦略について知っているかどうか、認定物件居住者を対象に尋ねたところ、「ある程度知っている」という回答が最も多く34.5%であったが、ついで「あまりよく知らない」が30.8%、「全く知らない」が29.9%となっていた。つまり、認定物件居住者にも関わらず、6割以上の人々がグリーンチェーンについてよく知らないことになる。また、自分の家が認定物件であるかどうか「知らない」と答えた人は54.7%にも及んでいた。これは政策が対象者に十分認知されていないことを意味している。このことは、政策が住民に十分認知されていないだけでなく認定制度がインセンティブとして自覚されていないことを意味する。つまり、この施策が緑化の動機づけとして誘因する力を持っていない、そしてコミュニティ形成につながっていないことになる。

このように、定住人口をベースにした、すなわち地縁によるコミュニティ形成に関して、今のところ「流山グリーンチェーン戦略」は必ずしも有

効に機能しているとは言い難い。

一方、グリーンチェーンの実施状況について、それとは伏せて内容だけを具体的に尋ねてみたところ、「高木の植栽による緑陰の形成」が比較的高く、46.7%まで実施されていた。また、住みやすいまちとして「豊かで美しい自然環境」を求める声も多かった(67.2%)。このことは、グリーンチェーン戦略の基底となるマインドが浸透している、と捉える材料として見ていいだろう。

その意味において、グリーンチェーン戦略という施策の直接の対象者ではないものの、その波及効果として活発化した市民ガーデニングクラブ「花恋人(カレント)」の活動実績(平日3日間会期のオープンガーデンへの7000人あまりの動員:2009年実績)は、グリーンチェーン戦略のマインドが市民全体を巻き込む可能性を持っていることを示した点で特筆に値するものだろう。

3. 流山市のガーデニングクラブとオープンガーデン

千葉県流山市にある「ながれやまガーデニングクラブ『花恋人(カレント)』」は、2005年5月、事務局を流山市公園緑地課(現在の「みどりの課」)に置いてスタートした。市長発案のガーデニングコンテストへの参加者を中心に、旧公園緑地課が支援する形で組織化されたのである。

この「花恋人(カレント)」は、「まちづくりはふるさとづくり」をモットーに、定例会・講習会・バスツアー・ガレージセールなどを展開している。また、ゴールデンウィークに開かれる「グリーンフェスティバル」(流山市)におけるインフィオラータ(花絵)の作成・解体販売、市内各種イベントへの参加、他地域のオープンガーデン見学や流山市のガーデニングコンテストへ審査員を派遣している。

このように、今やクラブの活動は多岐に渡るが、2005年11月に千葉県で初となるオープンガーデンを催して以来、やはりその活動の中心にはオープンガーデンが位置する。クラブのもうひとつの謳い文句「定年を迎える人の地域デビュー受け皿」

という表現もそれを示していると言っていいだろう。

「花恋人（カレント）」会員自身によるカウントによれば、2009年にオープンガーデンを実施した35庭の来場者の単純合計は6907人であった。また、土屋・新井によれば、アンケート調査からわかるオープンガーデン訪問者（見る側）のプロフィール（2009年実施）は以下のようになっている（留め置き法による）。すなわち、有効回答数423人のうち90.5%が女性、81.8%が50代から60代、流山市に居住する人が53.2%となっている。また、2人連れが一番多く41.8%、ついで3人連れが24.1%となっていた。来訪のきっかけは、「知人から聞いた」が49.4%と最も高く、ついで「広報ながれやま」からの情報摂取が36.2%であった。

それから、来訪者のうち、ガーデニング経験者が80.1%（表2）、来訪理由の第1位が「興味があるから」（344名、回答者423名の81.9%）となっている（表3）。このことからすると、ガーデニングを介した情報交換および交流がこの動員力の背景にあると思われる。もちろん、流山のガーデニングクラブの会員は、観光客誘致のために

庭の手入れをしたり公開している訳ではない。つまり、既存の観光客向けのサービスとは一線を画している。したがって、この状況は交流人口をベースにしたコミュニティ形成の萌芽として捉えることができるだろう。言い換えれば、ガーデニングという行為・活動が、趣味縁・情報縁の核としてコミュニティづくりと大きく関わっていることを示唆している。

4. オープンガーデン訪問者（見る側）の状況

「花恋人（カレント）」は、会員の増加に伴って、今やブロック別の運営（連絡・合議）体制を敷いている。2010年4月1日現在、①江戸川台東地区（町名：江戸川台東・東深井・こうのす台）、②江戸川台西地区（町名：江戸川台西・富士見台・中野久木・平方）、③初石・豊四季地区（町名：西初石・若葉台・市野谷・駒木・野々下）、④宮園地区（町名：宮園・名都借・松が丘・向小金・前ヶ崎）、⑤平和台・加地区（町名：平和台・加・流山）、⑥南流山地区（町名：南流山）、という6つのブロックからなっている。

2009年の調査によれば、会員自身による来訪者のカウント数もアンケートの回収率も江戸川台東地区が最も多くなっている（来訪者数のべ4268名＝全体の61.8%、アンケート回収数177＝41.8%）。ただし、オープンガーデン全体の状況を捉えるには、交通アクセスやピーク時対応、地区全体を通したルート設定も含めて、詳細に捉える必要がある。

そこで、2010年の調査では、江戸川台東地区10軒のオープンガーデンのうち、地区全体のちょうど半ばに位置するK邸に焦点を当て、その状況の把握を試みた。K邸は、2006年には266名、2007年には398名、2008年には572名、2009年には623名の来訪者があり、流山のオープンガーデンの中でも多くの来訪者を抱える庭のひとつである。ただ、2010年の会期は5月8日（土）～10日（月）であったため、9日（日）のみを調査対象日とした。

表2 ガーデニング経験はありますか

	度数	パーセント
はい	339	80.1
いいえ	78	18.4
無回答	6	1.4
合計	423	100.0

表3 来訪理由

	応答数		ケースのパーセント
	N	パーセント	
来訪理由：1興味があるから	344	60.8%	81.9%
来訪理由：2友人に誘われて	107	18.9%	25.5%
来訪理由：3偶然に通ったから	6	1.1%	1.4%
来訪理由：4昨年来て良かったから	69	12.2%	16.4%
来訪理由：5知人のガーデニングだから	33	5.8%	7.9%
来訪理由：6その他	7	1.2%	1.7%
合計	566	100.0%	134.8%
		(の<566)	(有効423)

表2・表3 土屋薫・新井正彦（2010）：『緑化と地域コミュニティ構築の担い手に関する研究』2009年度学内共同研究成果報告書 より作成

会期中のK邸来訪者全体のうち、9日(日)の来訪者は会期中の45.6%(340名:数だけに限れば8日は173名・10日は233名で3日間の合計は746名)を占めるが、アンケートの有効回答数は145で回収率は42.6%であった。その回答によれば、来訪者の78.6%が女性で69.7%が流山市内に居住しており、50歳～60歳代が中心ということになるが(図1)、来訪理由(表4)やガーデニング経験(表5)からすると、ここに来るのは趣

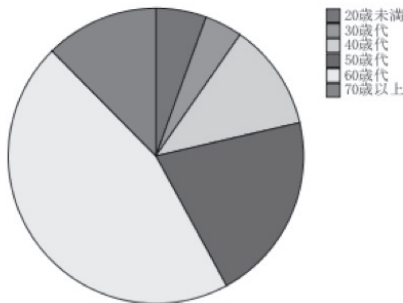


図1 来訪者の年齢

表4 来訪理由

	度数	パーセント
興味があるから	117	80.7
昨年良かったから	7	4.8
友人に誘われて	12	8.3
知人の庭だから	1	.7
家族のつきあい	2	1.4
偶然に通りがかった	1	.7
その他	5	3.4
合計	145	100.0

表5 ガーデニング経験

	度数	パーセント
自宅でやっている	102	70.3
やっていない	43	29.7
合計	145	100.0

味縁・情報縁による集団として位置づけることができる。

また来訪者の時間帯による内訳は図2・表6のようになっていた。

昼食を挟んだ前後の時間が多くなっているのは、付近が住宅街のため、飲食にかかわるアメニティ施設が無いことによると思われる。また、K邸が江戸川台東地区のルートの中地点に位置し

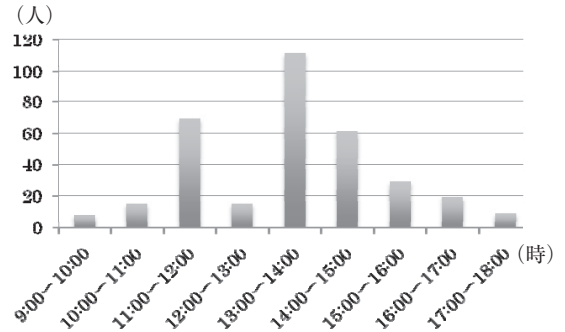


図2 来訪時間の内訳

表6 来訪時間の内訳

時間	来訪者数
9:00～9:30	2
9:30～10:00	6
10:00～10:30	8
10:30～11:00	7
11:00～11:30	37
11:30～12:00	33
12:00～12:30	12
12:30～13:00	3
13:00～13:30	19
13:30～14:00	93
14:00～14:30	13
14:30～15:00	48
15:00～15:30	16
15:30～16:00	13
16:00～16:30	15
16:30～17:00	4
17:00～17:30	5
17:30～18:00	4

ており(図3:K邸は5番の位置)、最寄りの交通機関からの徒歩移動や他の庭の見学時間も踏まえた結果が表れていると思われる。ただし、特に13時30分から14時の時間帯に来訪者が突出して多くなっているのは、団体イベントによる来訪者が集中したためである。

また、他の地区の庭を見に行くか複数回答で聞いたところ、1位が江戸川台東地区(のべ51.2%)、ついで江戸川台西地区(のべ33.9%、回答者数を母数とすると66.2%)に行く予定だと答えている(表7)。このことからすると、来訪者はきわめて地域限定的にオープンガーデンを回っていることがわかる。これは具体的な見学ターゲットとなる庭があり、その地区の庭を見る形でエリア選択が

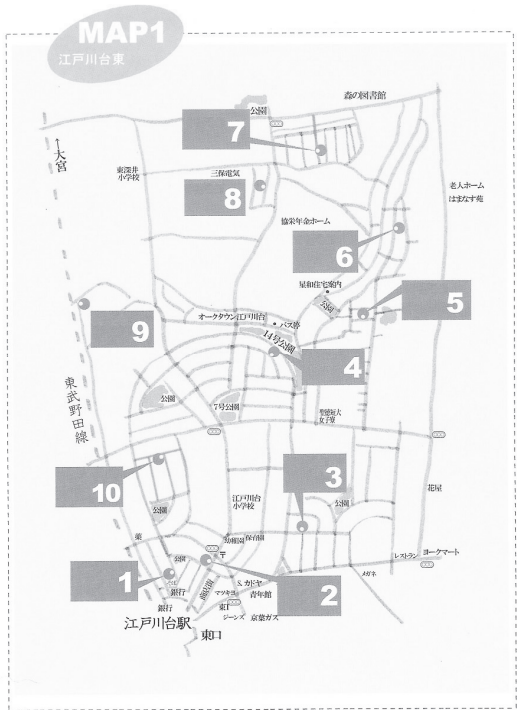


図3 江戸川台東地区の公開マップ
「花恋人(カレント)」作成の公開マップより一部転載

行われていることを意味している。つまり、漠然と「どこかの庭」を見られればいいと思っている訳ではなく、きわめて選択的な行為であると言ってもいいであろう。

それから、クロス集計で関連性があるという結果が出ているのは、年齢とガーデニング経験で ($p < .000$)、60歳代のガーデニング参加率が高く、30歳代以下の参加率が低くなっている(表8)。

表7 どの地区の庭を見る予定か

	応答数		ケースのパーセント
	N	パーセント	
江戸川台東	145	51.2%	100.0%
江戸川台西	96	33.9%	66.2%
初石	14	4.9%	9.7%
宮園	7	2.5%	4.8%
南柏	7	2.5%	4.8%
南流山	5	1.8%	3.4%
平和台	9	3.2%	6.2%
合計	283	100.0%	195.2%

表8 年齢別に見るガーデニング参加度

	ガーデニング経験		合計
	自宅でやっている	やっていない	
30歳代以下	2 14.3%	12 85.7%	14 100.0%
40歳代	12 70.6%	5 29.4%	17 100.0%
50歳代	21 70.0%	9 30.0%	30 100.0%
60歳代	55 83.3%	11 16.7%	66 100.0%
70歳以上	12 66.7%	6 33.3%	18 100.0%
合計	102 70.3%	43 29.7%	145 100.0%

このことは、前項で見た流山グリーンチェーン戦略がターゲットとするつくばエクスプレス開通後の新住民のガーデニングへの参加率が大きな意味を持っていることを示していると思われる。

5. オープンガーデン参加者(見せる側)の状況

「花恋人(カレント)」は現在会員が70名であるが、オープンガーデンに関する意識を捉えるため、会員全員を対象として留め置き法による質問紙調査を行った(2010年7月4日~25日)。

有効回答数は35で回収率は50.0%となるが、回答者のプロフィールは以下の通りである(表9~12, 図4)。

これによれば、女性の比率が91.4%、60歳代が45.7%、2人世帯が54.3%と半数を越えている点が際立っている。また、居住年数20年以上の回答者が82.9%に及ぶが、流山市以外の出身者が94.3%を占めている。また、クラブへの加入理由について自由記述で回答してもらったものをコーディングして集計した結果、「友人に誘われて」が34.3%と最も高く、ついで「交流がしたくて」が25.7%であった(表13)。オープンガーデンで庭を公開している会員が48.6%なのに対して、よその庭を見学している会員が94.3%となっていることと合わせると(表14・表15)、あらためて地

表9 性別

	度数	パーセント
男性	3	8.6
女性	32	91.4
合計	35	100.0

表10 家族員数

	度数	パーセント
単身	2	5.7
2人	19	54.3
3人	10	28.6
4人以上	4	11.4
合計	35	100.0

表11 居住年数

	度数	パーセント
5～10年未満	1	2.9
10～20年未満	5	14.3
20年以上	29	82.9
合計	35	100.0

表12 出身地

	度数	パーセント
流山市	2	5.7
その他	33	94.3
合計	35	100.0

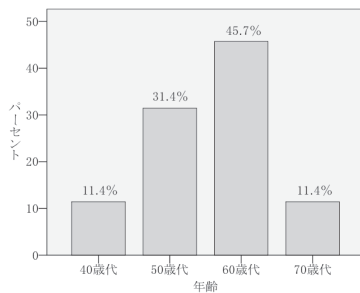


図4 参加者の年齢

縁に依らないコミュニティ形成の重要性を感じさせる。

6. むすび

きわめて限定的ではあるものの、オープンガーデン参加者（見せる側）と訪問者（見る側）の双方の意向を調べてみると、流山市の事例では、参加者と訪問者のどちらも自分の趣味を通じたネットワークづくりを求めていることが確認された。これはコミュニティ形成志向とも言えるし、交流人口創出の核とも言える。その意味で地域づくりの資源とともに「着地型観光」の大きな資源とし

表13 加入理由

	度数	パーセント
参考にしたい	7	20.0
友人に誘われて	12	34.3
交流がしたい	9	25.7
地域のため	5	14.3
その他	2	5.7
合計	35	100.0

表14 見学経験

	度数	パーセント
ある	33	94.3
ない	2	5.7
合計	35	100.0

表15 公開経験

	度数	パーセント
毎年している	17	48.6
何度かしたが今はしていない	4	11.4
一度ある	7	20.0
全くない	7	20.0
合計	35	100.0

て捉えられる。今後この資源をより大きな実りあるものとするためには、性別や年齢に大きく偏りのある状況をどのように是正するか、という観点から条件整備を整えることが望まれるだろう。

参考文献

- 相田明・鈴木誠・進士五十八（2002）：『英国ナショナル・ガーデン・スキームによるオープンガーデンの発祥と活動』『ランドスケープ研究』65（5）
- 赤石浩美（2007）：『深谷市のまちづくりにみるオープンガーデン活動の役割』『Komazawa Journal of Geography 駒澤地理』No.43
- 内閣府（2010）：『国民生活に関する世論調査報告書』
- 島川崇（2008）：『観光につける薬 サステイナブル・ツーリズム理論』同友館
- 高橋一夫・大津正和・吉田順一編著（2010）：『1からの観光』中央経済社
- 多摩大学総合研究所・大和ハウス工業生活研究所（1993）：『レジャー産業を考える』実教出版
- 土屋薫（2010）：『着地型観光におけるニーズのマッチングに関する基礎的研究—千葉県流山市におけるオープンガーデンを事例として—』『レジャー・レクリエーション研究』65号、日本レジャー・レクリエーション学会
- 土屋薫（2010）：『『ガーデン・シティ』に見られる田園理想郷の系譜』『ニュージラード研究』第17巻、ニュージラード学会
- 土屋薫（2010）：『流山グリーンチェーン戦略』に見られる住民参加の課題』『コミュニティ政策学会第9回大会資料集 第2分科会』
- 土屋薫・新井正彦（2010）：『緑化と地域コミュニティ構築の担い手に関する研究』2009年度江戸川大学学内共同研究成果報告書